

書評

木田厚瑞 著

在宅酸素療法マニュアル 新しいチーム医療を目指して(第2版)

KKR 札幌医療センター院長

川 上 義 和

このたび出版された第2版は、1997年の第1版に続く改訂版である。しかし、単なる改訂版ではなく、ほとんど全面的に書きかえられたことが明瞭であり、木田厚瑞教授のこの本に賭ける情熱と熱気を堪能させるものとなった。

第2版では疾患の一般的な解説を避け、また原理など基礎的な事項は最低限に抑えられており、実地的なマニュアルとして一新された。コンセプトが明快に書かれていること、在宅酸素療法の関連領域——つまり包括的リハビリテーション、医療連携、医療倫理とインフォームド・コンセントを踏まえたうえで、在宅酸素療法の効果など実地的な記載となっている。

第1版ではこれら前段階の記述が少なく、機器の構造や取り扱い方法が比較的多かった印象があるが、第2版ではこれらの機器に関する項目は少なくなっている。医療職としては、構造などは常識として知っていればよく、実際的なことは業者が行うという理由からであろう。「NOTE」として知っておいたほうがよい知識やメモが随所に要領よくまとめられているのも、新しい点である。

第1版は22章からなり、これに統計資料、様式などが参考資料として追加されていた。第2版ではこれら参考資料はよく取捨選択されて章の中に記載されていて、読みやすいように工夫されている。総ページ数は増えているが章の数は15に減っており、それだけ項目と内容を吟味して絞られた結果であろう。

とくに重点が置かれているのは、在宅酸素療法における日常生活の評価と指導、急性増悪への対応、薬物療法などであろう。急性増悪をどう発見するか、専門施設への紹介のタイミングなど詳細に書かれており、薬物療法の重要性も適切に評価されている。これらはいずれも実地医師の参考になることばかりである。

在宅人工呼吸療法(NIPPV)が広がりを見せているなか、これについても詳しく書かれているのが第2版の特徴である。病院から自宅へ移る基準、コンプライアンス、長期NIPPVの導入基準など、日常の管理に役立つ記載である。

COPD(慢性閉塞性肺疾患)につ

いての知見が増えているところから、在宅酸素療法の観点からこれら新しい知見を積極的に紹介して、実地診療に役立てるのに貢献している。実際、在宅酸素療法の導入基準などはCOPDの研究から生まれたものであり、また患者の多数がCOPDであるところから、COPDについての知見は基礎として重要である。

種々の問題点が将来の課題として残るなかで、前回の診療報酬改定で在宅酸素療法の点数が大幅に引き下げられたのは、残念なことであった。木田教授は、将来の課題として医学的問題、社会的問題、機器に関する問題、研究方法の問題、患者要望の問題など多くを挙げている。深い理解と広い実践があって初めてなされる指摘ばかりである。

在宅酸素療法については、誤った、あるいはエビデンスに基づかないドグマを強調する向きが一部にはある。木田教授の豊かな見識は本書でも遺憾なく発揮されており、このようなドグマのかけらも見受けられない。安心してお勧めするゆえんである。

以上、第2版の書評を試みた。本書を医師ばかりでなく多くの医療職(看護師、呼吸療法士、理学療法士、作業療法士、保健師、栄養士、薬剤師、検査技師、救急隊員など)に強くお勧めする次第である。

〔A5 頁360 2006年 定価
4,515円(本体4,300円+税5%) 医学書院刊〕

* * *